

大学の地域づくりと地域の大学づくり

大坂 祐二

市立名寄短期大学



□ はじめに

市立名寄短期大学は、日本で一番北にある公立短期大学である。札幌から北へ二百kmあまり、人口二万七千人という小さな街の、学生四百八十名、教員四十一名、職員十五名（嘱託を含む）という小さな短大。そう聞けば、地域・住民と大学の距離は相当に近いものと大方は想像されるだろう。本学の教育が家政・栄養・保育・教育・福祉・看護といった領域にわたるものとなれば、なおさらである。

また、本学は道北地域研究所という「地域社会の現実的課題に関する総合研究」等とその設置目的に掲げる研究的

関を置いている。研究所が主催するシンポジウムや公開講座は、研究者と住民が地域の諸課題について学び、語りあう場となっている。このことも「地域・住民と大学の協働」という特集テーマに相応しいものに違いない。

一方で、しかし、と思わずにはいられない局面に私たちは立たされている。田舎の小さな短大にも、否それだからこそ、十八歳人口の減少と受験生の四大志向という波は否応なく押し寄せている。大学「生き残り」の模索のなかで、この短大はどれだけ地域の人々に理解され期待されているのか、あらためて問われているように思う。

研究と教育で地域の課題に答え、地域の期待に応えるの

が「地域にねざした大学づくり」の本筋だとすれば、これからここで述べることはその本筋からは少しはずれているのかもしれない。しかし、小さな街の大学にとって、この街に「大学があつてよかつた」「大学があればこそ」と地域の人人に言ってもらえるような関係づくりは大学づくりの重要な課題なのだ。ここでは、そのような課題にかかわる事例を、「大学の地域づくり」と「地域の大学づくり」という二つの角度から紹介したい。

□ 構成劇「ピヤシリ賛歌」の取り組み

昨年二〇〇〇年は、名寄の土地に初めて組織的な開拓入植の鉞が下ろされてから百年という節目の年であつた。様々な記念行事・協賛行事が催されたなかで、劇作家でもある本学の松岡義和教授の呼びかけによつて七月九日に上演された市民参加野外劇「ピヤシリ賛歌」は、キャスト、

おおさか・ゆうじ●一九六四年、北海道生まれ●「青年活動と青年の自立過程」大前・千葉・鈴木編著「地域住民とともに」（講座主体形成の社会教育学3）北樹出版、一九九八年、「YOSAKOIソーランがもたらしたもの」『月刊社会教育』国土社、一九九九年十月号●本報告後半の取材・執筆には、文中にも登場する同僚の鈴木文明氏に協力を仰いだ。従つて本報告は本来なら鈴木氏との連名で発表すべきものだが、氏の厚意により単著として発表することにさせていただいた。

スタッフ六百名、観客千五百名がともにつくる、記念行事のなかでも出色のものであつた（「ピヤシリ」とは市民のスキー場としても親しまれているピヤシリ山のこと）。

「ピヤシリ賛歌」は、名寄の歴史のうち先史時代からアイヌの人人の暮らし、開拓を経て戦後までを描いた構成劇だ。出演と裏方には短大の学生・教職員のほか、短大同窓会、市内のアマチュア劇団、合唱サークルなどの文化団体、ボランティア団体、企業、市長・助役をはじめとする市職員や市議会議員などから、六百名もの人々が集まつた。

しかし、これは単なる市民あげての記念行事ではなかつた。構成劇の最後の場面では、青年団の若者たちによる演劇活動と、一九五〇（昭和二十五）年に開拓五十年を記念して三日間にわたつて開かれた演劇発表会のエピソードが描かれている。戦争が終わつてわずか五年というなかで文化の灯を掲げた人たちがいた。そうした先人の足跡に学び、未来をきりひらく力にしようという思いが、そこには込められている。

芸術・文化の街なる

名寄は道北の交通の要衝であり、鉄道の街として栄えた歴史をもつ。そしてその鉄道の街で、青年団や高校生の演劇活動とともに戦前・戦後の演劇活動の中心となり、開拓五十

年の演劇発表会の中心になっていたのが国鉄の労働者たちであった。先述の松岡氏は「ピヤシリ賛歌」のパンフレットにこう記している。「鉄道は物資や人を運び、新しい文化の息吹も運んできました。名寄市は詩人の街であり、芸術・文化の街としても発展したのです。…今日的な経済不況とは比較にならない物資の不足、食糧難の時代に先人たちは芸術・文化の花を咲かせたのです」

名寄はまた自衛隊の街、国や道庁の出先機関が多い街であり、人の異動の多い街という性格をもつ。そして、官公需にも支えられて土建・建築業や商業が発展した街である。若年者の流出があっても、周辺町村の人口を吸収する形で七〇年代までは人口を維持してきた。

しかし、八〇年代以降、農林業の衰退、ローカル線の廃止と国鉄の分割・民営化、官・民ともに押しよせる「リストラ」の波といった事態は、名寄の街を支えていた柱にことごとく打撃を与え、人口の減少に拍車をかけることになる。統計的に調べたわけではないが、いま名寄の街に人を引き寄せるものは、外部資本による大型小売店とパチンコ店、それに病院と短大だと言いうことができるかも知れない。なかでも毎年二百人の若者を迎え、送り出している短大の占める位置は決して小さくない。かつて鉄道が人を運び、

文化の息吹を運んできたように、名寄短大はこの地域に文化の息吹を運ぶものでありたい。いや、私たち教職員・学生はすでに、地域のなかでの実習・演習やボランティア活動、サークル活動、研究会、講座などを通して人々とふれあい、文化のそよ風ぐらいいはおこしていると思っている。

「ピヤシリ賛歌」

もちろん、そんなそよ風だけでは市民参加の構成劇は成功しなかった。

街をにぎわす

西暦二〇〇〇年、名寄開拓百年というお祝い気分も手伝って、ふだんは文化活動とは縁遠い人たちも含め多くの市民が参加したことに大きな意味があったのだ。初めは台詞を読むのも照れくさかった人たちが、やがて「はまって」ゆく姿があちこちに見られた。パークゴルフ仲間八名で出演したある市職員は、本番を終わっての感想を公演記念文集のなかで次のように語っている。「満足感と充実感があった。でも、なぜか脱力感がある。八名から出た言葉は、終わったねではなく、明日から何をするの、寂しいね…であった」

また、ある人は、次のような感想を寄せている。「名寄が百五十年になった時、私は九十三才、名寄が二百年になった時、私は百四十三才になる。その時がきたら、私は『ピヤシリ賛歌』を語る老人の役で、また出演したいと思って

いる。名寄百年の大賛歌『ピヤシリ賛歌』の公演に参加することができたことを、本当に感謝している。私のふるさと名寄を誇りに思う」

話がやや回りくどくなつたが、短大の教職員・学生がおこすそよ風と、この土地に生まれ育つたことに誇りをもつ人々の出会いによつて、「ピヤシリ賛歌」は成功裡に幕を下ろした。実行委員会事務局を務めたある市民は、記念文集に次のように記している。当日の後片付けが終わつた深夜、松岡氏とともに出かけた店の主人から、衣装をつけたままの人たちが三組も来たと聞かされた話に続けて、彼はこう語る。「出演した人も、観てくれた人もそのままでは家に帰れなかつたようです。たつた一本の缶ビールでも、それぞれの人たちに共通の感動があれば、それはビールなどに替えられないエネルギーとなつて、街をにぎわすことを学びました」

二〇〇〇年という年は、実は名寄短
演劇で街おこしを

大四十周年の年でもあり、記念事業の一つとして構成劇「明日を拓く名寄短大」が、松岡氏の作・演出で上演されたことも付け加えておかなければならない。「ピヤシリ賛歌」公演から三カ月あまりのことであり、学生・教職員を中心とするキャスト、スタッフに多く

の市民・同窓生の協力があつたことは言うまでもないが、ここではそのことに触れるにとどめておく。

さて、その短大四十周年劇の打ち上げの席で、『ピヤシリ賛歌』の感動をもう一度！「名寄市を芸術・文化の街に！」と書かれたチラシが配られた。「名寄一〇一年劇」への参加呼びかけである。「富良野市なんかには負けてたまるか！名寄市民は市民が主人公の演劇で、街おこしをすすめるようじゃありませんか」というのが松岡氏の呼びかけの言葉だ。

田舎の常で、人々はわがマチには何もないと口にしがちだ。しかし、市民参加劇は人々の心に文化の灯をともし、この街の暮らしを楽しむこと、人々が心をつつにしてともに汗を流すことを思い出させ、地元の資源を見直し、街ににぎわいをもたらしたのではないか。そう、これは短大の教職員・学生が仕掛けた街おこしなのだ。

農業経営学の立場から農村地域の活性化について研究してきた長谷山俊郎氏は、地域活力向上のための諸方策推進に基底的な作用を与えるのは、地域における「共」のつちかいであると述べている。すなわち、地域の人々が信頼関係を醸成し、思いやりとあたたかみをもって一緒に成長しようとするこゝと抜きに地域の活力は根付かないといふので

ある。

確かに文化で腹はふくれない。地域が抱える困難に研究者はしっかりと向きあうことが求められている。しかし、小さな大学の存廃がこの小さな街の活力に大きな影響を与えるとするれば、文化活動のような地域の人々と信頼関係を結ぶ取り組みを大学側から発信したことに大きな意味があったと思えてならない。

目 「二〇〇年劇」から「二〇一年劇」へ

二〇〇一年七月、短大駐車場横に一張りのテントが立ち、土、日曜になると金づちやのこぎりの音があたりに響く。

九月三十日の「二〇一年劇」上演に向けて大道具づくりが始まった。今回の演目は、やはり松岡氏による「群像」という作品で、昨年のような構成劇ではなく本格的な舞台劇だ。舞台は昭和十七年。いつ召集が来てもおかしくない不安な日々。東京の大学から夏休みで戻っていた一彦を中心に、若者たちが新劇の劇団をつくる。情熱を傾けながら公演の準備をすすめるうちに、仲間の一人は徴兵にとられ、またある者は鉄道ストライキの煽動者として特高に捕まり、……といった物語である。もともとは今から十年ほど前に、北見市の開基九十五周年記念公演として地元アマチュア劇

団の要請によって書かれた作品だが、北見にも名寄にも、この作品と同じような若者たちが実際にいたのだ。

名寄で終戦からわずか五年目に三日間の演劇発表会が開かれたのは、戦時下でもこのような若者たちの情熱があったからに違いない、というのが私たちがこの作品に重ねる思いだった。九月半ば、アメリカでの同時多発テロ事件が伝えられ、毎日のニュースが次第にきな臭くなってゆくなかで、この作品を上演することの重みも増していったように思う。

作品の重みにもかわらず、練習は適度の緊張感を保ちながら、しかし終始なごやかだった。七月から週二回、火曜と木曜の夜には短大の児童文化演習室に役者が集まり、本読み、立ち稽古と練習が進められた。主な役者のなかには短大の学生や教員もいる（かく言う私も今回は役者を仰せつかった）が、半分以上は仕事が終わってから短大に駆け付ける人たちだ。全員がそろうことはまずないので、代役を立てながらの練習になる。夏休み中は自主練習にせざるを得ないが、本番直前の九月下旬には保育所実習の学生たちが練習から抜けるのがつらい。それでも練習がなごやかに進んだのは、昨年の経験から芝居を楽しむ余裕が生まれているからだろうか。昨年の舞台を知らない一年生も、

名寄市民劇場が101年劇「群像」を上演

演劇への情熱を描く



演劇にかける若者の姿を描いた「群像」

来年2月に札幌公演も 舞台芸術地域交流事業に参加

【名寄】名寄市民劇場「〇一年劇」群像（作・演・中村園義和市長名寄短期大学教授）公演は九月三十日夜、市民会館で行われた。戦時中、芸術や文化の必要性を届ける上演を目指す人々の情熱を通して表現したこの作品、来年二月には北海道舞台芸術実行委員会が開催する、平成十三年度舞臺芸術地域交流事業（札幌市）での公演が決定した。

昨年の名寄市開拓百年記念市民参加野外劇。名寄短大の開学四十周年構成劇などを契機に続けられてきた「群像」。これは松岡さんが北見市の九十年を記念して制作した作品を、名寄版として書き直したものだ。物語は、昭和十七年から十八年にかけての戦時中の道北のある町で、どこか、主人公の一彦は、小説家志望の大学生。一彦は、トルストイの「アナ・カレーニナ」を上演したいと脚本を執筆中だった。一彦と友人の鉄造員

杉本、測量技師の向井。一彦の妹の純子とその同級生の富子らを取り巻く人々が口コミで集い、やがて脚本を印刷し、舞台げいごが始まる。戦争と平和がテーマの本作品では、木銃をたいて歩いたり、電球には黒い覆い、特高（特別高等警察）、治安維持法など当時のさまざまな言葉が飛び交う。若者たちは上演を夢見て、意見を交わし、夢を追い続けるが、やがて向井に召集令状が来る。警察の取り締まりに続き、一彦にも赤紙が来て、学徒出陣となる。

一彦を乗せた機関車を見送る富子が「生きて帰ってきてねえ」と思いを絶叫し暮を閉じる。カーテンコールで、主人公から「劇中の佐藤一彦はさつと帰って来られたと思いません。戦争が終わってわずか五年、昭和二十五年六月、名寄開拓祭が二十も開かれたのです。二十一世紀を生きる僕たちも、夢を希望持つて頑張っていきたいと思

います」と、感謝の言葉があり、全員で「ジャンリ賛歌」を合唱した。来年二月の札幌公演は、公演終了後、制作担当から発表された。舞台芸術地域交流事業は、市民・町民が主体となり創作活動を行っている団体を選定し、一月から二月にかけて合計九日間開催される。講演やセミナー、ワークショップがあるが、「群像」は地域のアステジ部門で公演が決まった十五の団体が、ミニネットされ、一次審査で五団体

が残り、一次審査の結果三団体の一つに選ばれた。公演はかえる2・7を会場に行われる。松岡さんは「大変な苦なこと。これから二月まで、木曜例会でせりふを忘れないためにけいこし、二月を迎えたい。打ち上げは、札幌公演を終えてから」と感謝していた。

『北都新聞』

2001年10月1日版より

松岡氏の授業やサークル活動のなかで舞台づくりにはある程度の経験を持っている。彼らの頑張りやそれを見守る周りの目も、なごやかな雰囲気をつくる要因だったろう。

名寄に暮らす思いを

持ちよって

持ち込まれたのは舞台づくりの経験だけではない。隣町の今はなくなってしまった映画館で生まれ育

ったある男性は、ブルース・リーの物まねチャンピオンの面目躍如とも言える大立ち回りを特高刑事役で演じた。また、ある学生は、ボランティアで通っている不登校の子どもたちのたまり場から一人の女の子を連れてきた。女の子は、かつての彼女を知る教員もびっくりするような舞台度胸を見せた。

客席にも様々な思いが持ち込まれていたに違いない。作品の冒頭、主人公・一彦の父親で土建屋を営む熊蔵が、小説家を志す息子について「やりたいことをやらせた上で土建屋になるのと、やらないでしぶしぶ親の後を継ぐのとでは身の入れ方が違う」と語る場面がある。公演後寄せられた感想のなかに、この場面を自らの後継者のことを思いながら見たという土建業者の声があった。

終わってみれば「一〇一年劇」は、スタッフ、キャスト合わせて約百人、三百席の市民会館がほぼ満席になるもの

となった。市民参加野外劇に引き続き今回の取り組みは、日頃演劇活動をしている人だけではない多様な人々が参加しているところ、名寄市民が演じ名寄市民が観るところに特徴がある。だからこそ、様々な経験や思いがここに持ち込まれ、お互いの「名寄に暮らす思い」を出しあい確かめあうような舞台づくりができたのだろう。加えて言えば、同様の市民演劇は各地に存在するに違いない。しかし、そのなかに文化団体、鑑賞団体や公民館ではなく大学が位置付いているところはそうなのではないだろうか。

なお、「一〇一年劇」には更にうれしいニュースが付加わった。北海道庁や財団法人北海道文化財団などが舞台芸術活動の活性化、人材育成を目的に実施する事業「北海道舞台塾」の一環として、二〇〇二年二月、札幌で公演することが決まったのだ。直接には昨年の「ピヤシリ賛歌」の実績が買われた形だが、これがはずみとなって、昨年、今年と続いた取り組みとそこから生まれたつながりを今後に生かすことができたと願っている。

四 名寄青年会議所と市立名寄短大の四大化

以上が「大学の地域づくり」だとすれば、これから述べる事例は、「地域の大学づくり」すなわち地域の人々が大

学づくりに関わっていかうとするものである。

小さな街において、青年会議所は重要な役割を担って存在している。名寄市においても、本市で開催されるイベントの多くは名寄青年会議所（以下、名寄JC）がこれまで蓄積してきた企画運営に関するノウハウと、彼らの機動力・動員力が無くては成立し得ないであろう。こうした力量は他の諸団体からはるかに抜きん出ている。しかし、一九八〇年前後に八十数名だった会員数は、地域経済の落ち込みにもなつて減少し、現在は四十五名である。それでも、この夏にはここでも述べる「てっしフェスティバル―地域の学校づくりを応援する集い―」の他、「24時間テレビ愛は地球を救う24」にも完全参加するなど、まちづくりに大いに貢献している。

また、名寄JCは市立名寄短期大学において九八年度から将来構想の選択肢のひとつとして検討されてきた「四大化」に対して、賛意を表明した団体である。現在、四大化のための「推進計画室」が学内に開設され、市庁舎内にも助役を座長とする「市立名寄短期大学将来構想作業委員会」が設けられたが、四大化に対する市民の大きな反対の声はないものの、賛同の声も高まってきてないのが実情である。この状況の中で、名寄JCは本学の四大化とまちづ

くりを結びつけ、四大化を支援する活動に取り組んでいる。

なぜJCが大学づくりか

名寄JCにとって、これまで短大はそれほど重要な存在ではなく、本学との実質的な交流もほとんどなかった。あったとすれば、本学「道北地域研究所」の諮問委員として名寄JCの直前理事長および理事長が委嘱されていたこと、名寄JCの月例会等の講師を依頼すること、その程度である。また、高橋雅樹理事長によれば、短大は「日常的に係はなかった。口出ししなくとも順調に存続・発展していくもの」と認識された存在であった。

ところが、高橋理事長は昨年十二月に本学教職員組合が主催した「大学問題に関するシンポジウム―短大の将来とまちづくりを考える―」に報告者として招かれ、本学の実情を知るのである。

このシンポジウムにおいて、本学の村本徹教授が本学の現状と将来予測について報告した。その報告を要約すれば、おおよそ以下の通りである。生活科学科生活科学専攻は他専攻からの第二志望の学生を合格させることで学生数を確保しているが、実質的には定員割れである（昨年度入試では第二志望の学生を合格させても定員を確保できなかった）。現在ある程度の入試競争倍率を保っている栄養専攻、

児童専攻（幼児教育・保育系）、看護学科も資格制度の改正や十八歳人口の減少、四大志向の高まり等によって早晩定員割れの状況に追いこまれる。

この報告を聞いて、高橋理事長は「短大存続の危機」を実感するのである。当時も本学の状況は地元紙によって報道はされていたが、「それでも何とかなっていく」と思っていたからである。それゆえに、このころ名寄JICの一部では企業誘致は無理かもしれないが、短大があることを実績に大学・短大もしくは専門学校を新たに誘致できないかということも検討されていたのである。

その後、短大教職員組合のシンポジウムの内容は、高橋理事長から名寄JIC会員に報告された。そしてさらに、理事長は短大の四大化支援を二〇〇一年度の活動のひとつにしたいとの提案をした。その時の印象を、理事長は次のように語っている。「私自身がそうであったように、短大の存続の危機は実感されないようであった」

名寄JIC会員と

短大教員との交流

五月になって、本学の鈴木文明助教授は先の村本氏とともに名寄JICの月例会で、「本学の将来」について話す機会を与えられた。高橋理事長のねらいは、短大の危機を会員に「実感」してもらうことにあったように思える。

その際に、鈴木氏は自戒の念をこめ、次の発言をした。

これまで本学は小規模短大でありながらも他大学・短大と比較して、少なくとも「平均」程度の地域貢献はしてきたように思う。たとえば、「道北地域研究所」が中心になって講演やシンポジウムを開催してきた。また、多くの教員が市の各種委員会・審議会の委員を務めている。名寄市および周辺町村をフィールドにした研究もしている。本学教員による講演や講習も多い。一般市民が授業を受講できるシステムもある。私の知る限りではあるが、このような取り組みが他の大学・短大の劣後にあるとは思えない。しかしながら、名寄JICの会員を含めると多くの市民にとって、短大もしくはそこに働く私たちが教員の存在は遠い。そのひとつの要因は、私たち教員が「個人」として市民と関係を切り結べていないことにあると考えている。「気楽なおジさん」で比較的交友関係の幅が広いと若干自負している私自身も、固有名詞で付き合っている人が、また付き合ってくれている人がどれほどいるだろうか。

そして鈴木氏はさらに、「危機にある短大の教員が、また応援していただくとしている側の短大の教員が申し上げることでないかもしれない」と前置きし、大学があ

ることによってできるまちづくりの可能性を話した。

これをきっかけに、六月には名寄J.C会員と短大教員との交流会―ボーリング&飲み会が開かれた。さらに、次に述べる「てっしフェスティバル―地域の学校づくりを応援する集い―」にも、多くの教員が参加することになった。

「てっしフェスティバル
―地域の学校づくりを
応援する集い―」
これは八月四日に天塩川河川敷で行われた、名寄J.C主催のイベントである。仮設ステージではプロのミュージシャン

ンによるコンサートのほかさまざまなアトラクションが行われ、いくつもの屋台も出店された。その中には、短大の教員、学生による屋台もあった。多くの市民が訪れ、最後は打ち上げ花火でしめくくられた。

この時、名寄J.Cは「名寄短大の四大化」にむけた資金造成のために、ビールとオードブルをセットにした二千円の食券を販売し、その収益は名寄市に寄付された。また、当日は名寄短大を紹介するパンフレット等を会場に訪れた市民へ配布した。

名寄J.Cはすでに地元紙で「四大化賛成」を表明していたが、そのことを名寄市および市民に対して直接投げかけた最初の活動である。



インターネットで 四大化支援

八月に名寄J.Cは「名寄短大四大化を考える掲示板」を彼らのホームページに開設した。それまでも、名寄市役所のホームページ上に設けられた「名寄市情報掲示板」において四大化は議論されていたが、新たな議論の場を提供した。

この掲示板を開設するにあたって、高橋理事長は次の一文を寄せている。「名寄J.Cは、おおよけに名寄の四大化を推進している二十歳から四十歳まで約四十五名の会員を有する団体だけど、大前提にあるのは、自分らの街のことは、自分らでよく考えて、地域

（自治体）の意思決定に反映・影響して行こうぜ！って言うことなわけで、だから今、この名寄において緊急性の高い重要課題は、名短の将来計画をどう描くか？っていうことじゃないかと思うのです。（中略）名短の更なる維持・発展が名寄の未来を左右するぐらいの大きな意味を持つことだと思っております！！

また、同理事長は「名寄市情報掲示板」にも積極的に投稿を続けている。「私がJICの理事長であるという」ことで、名短の将来計画の進捗について、日頃様々な意見ご質問をうかがうことが多くなっております。（中略）総論的に言うと、皆さん名短の有形無形を問わず価値を認められておりまして、存続・発展がこの地域に住む人達にとつて及ぼすプラスの価値を見ておられます。（中略）『費用対効果』の効果（価値）をどう見るか？で費用が大きく見えたり小さく見えたりするものであります。価値を見て、費用を小さく済む目処さえあるならば、四大化を早期に実現する方が良いと思いませんか。手だてが遅れるごとに、發展的改組改編はドンドン難しくなっています。本件に関して、現状維持はありません。」

Ⅷ おわりに

現在、地方の小さな自治体の衰弱化は激しい。小泉内閣がこれから出そうとしている地方切り捨ての「骨太な改革」は、この状況をさらに悪化させると予想されている。

実際に、これまで述べてきた本学の四大化について、市行政担当者が今のところ踏み切れないままであるのも、地方財政の先行きの「不透明さ」によるところが大きいと考えられる。また、「遠山プラン」が急激に進展するなか、国立大学の存廃が問題になっている。その流れを受けて「国立大学が廃学するかもしれないという時代に、このような田舎の小さな公立短大が必要なのか」という意見も聞かれないうわけではない。つまり、本学のように弱小な地方都市が設置する短大は、これら「行財政改革」と「大学改革」のなかで二重に存亡の危機に瀕しているのだ。

名寄JICのこれまでの活動目標は青少年の健全育成であり、地域の活性化であり、会員の資質向上であった。短大はJICが支援しなくても「在り続けるはず」のものであり、JICの守備範囲に短大はなかった。しかし、この危機的状況において、その従前の守備範囲を超えて「四大化」に対して賛意を表明し、そのための活動を開始した。

しかし、私たち教員は依然として短大が「在り続ける」ものであることを前提に、「大学による地域貢献」を考え

ているのではないだろうか。われわれもこれまでの守備範囲を超えた「地域貢献」を模索していく必要がある。本報告前半の市民演劇はまさにその「これまでの守備範囲を超えた」ものではなかっただろうか。

参考文献

名寄市史編さん委員会編『新名寄市史』第一卷・第二卷、二〇〇〇年

長谷山俊郎『地域活力向上のデザイン―その人と組織―』農林統計協会、一九九六年

